

古事記に学ぶ その 26

仁徳天皇の後継をめぐる出来事

<I> 弟の反乱と三兄弟の葛藤

先の仁徳天皇が亡くなった後、まだ難波（なにわ）の高津宮に居た頃のできごと。

大嘗祭の酒宴を開いた時に、大江之伊邪本和気命（おおえのいざほわけのみこと・次の天皇）は、酒に酔ってそのまま寝てしまった。そこへ弟の墨江之中津王が現れて、暗殺を目的に宮殿に火をつけた。これを見た大和の漢（あや）の直（あたえ）の祖先である●阿智（あち）の直（あたえ）が、眠っている天皇を密かに馬で連れ出して大和に向かった。馬が河内の多遅比野まで来た時に、天皇はようやく目が覚めた。阿智（あち）の直の説明を聞いて天皇は事の次第を知った。

＊閑話休題（「古事記に学ぶ その 22」の復習）

応神天皇の時代に百済の照古王（しょうこう）からの土産を持って阿知吉師（あちきし）が渡来した。阿知吉師は、阿直（あじき）の史（ふびと：文書記録官）の祖先となった。

この時に百済から賢人として渡来したのが和邇吉師（わにきし）で、この人は文（ふみ）の首（おびと：首長）の祖先となった。「文の首」は、文筆によって朝廷に貢献する者を意味する。

「吉師」は百済での官位を示すもので、尊称として使われていたと考えられる。

この時期に、秦（はた）の造（みやつこ）の祖先、漢（あや）の直（あたえ）の祖先等も渡来した。

難波から大和への逃避を続け埴生坂まで来て振り返ると、高津の宮が空を染めて燃えているのが見えた。二上山（ふたかみやま）を越える大坂口の麓まで来ると、一人の若い女が現れて、

「武器を持った兵がこの山中で待ち伏せしています。遠回りになりますが、南へ廻って当麻道を進んだ方が良いでしょう」と言う。 二上山 <https://yahoo.jp/s4Wujx>

女の助言に従って当麻道を進み、大和の石上（いそのかみ）の神宮に難を逃れた。

石上（いそのかみ）の神宮は、JR 桜井線天理駅の東方の山懐にある。

そこへ次弟の蜷之水齒別命（たぢひのみづはわけのみこと）が現れた。天皇は疑心暗鬼になっており、「お前は、もう一人の弟墨江之中津王と手を組んで、私を狙っているのではないか」と言って会見を拒否した。蜷之水齒別命はそのような意図はないことを言明したのだが、天皇はこう言葉を返した。

「ならば、墨江之中津王を殺して証明せよ」

蜷之水齒別命はすぐに難波に向かった。そして墨江之中津王の居所を訪ね、警護役の隼人の一人●曾婆加里（そばかり）に会って、こう伝えた。

「お前が仕えている墨江之中津王を殺してくれば、私が天皇になり、お前を大臣として重用するぞ」
曾婆加里は同意して、墨江之中津王が厠に入ったところを狙って刺し殺してしまった。

任務を終えた蜷之水齒別命は、曾婆加里を伴って大和へと向かったが、二上山の大坂口まで来た時に、複雑な思いにかられた。

曾婆加里は自分のために大きな働きをしてくれた。とは言っても曾婆加里は自分の主君である墨江之中津王を殺すという不義を働いた。しかし私としては曾婆加里の恩義にも報いなければならない。

敵の腹心である曾婆加里に恩賞を与えれば、兄（天皇）にどう説明すれば良いのか。さて如何したも

のか……。

「今日はこの地に泊ってお前に大臣の位を捧げよう。そして明日大和に入ろう」と持ち掛けて、二上山の麓に仮宮殿を造って宴を開いた。顔が見えぬほどの大盃で酒を飲みかわし、曾婆加里が大盃を傾け顔が見えない瞬間を狙って、傍らに隠してあった太刀を取り出して一撃で首を切り落としてしまった。その日は仮宮殿に留まり翌日、蛭之水齒別命は大和の石上の神宮をめざした。

このことから、この地を近飛鳥（ちかあすか）と呼ぶようになった。

そして大和に入り、穢れを清める禊を行い、その翌日に石上の神宮に上がった。

天皇は、約束通り墨江之中津王を殺してきた蛭之水齒別命（たちひのみづはわけのみこと）を受け入れて歓待した。

<2> 履中天皇の系図

仁徳天皇の子である大江之伊邪本和気命（おおえのいざはわけのみこと）は、大和の伊波礼（いわれ）に若櫻の宮を造り、履中（りちゅう）天皇と名乗って天下を治めた。（第17代天皇）

若櫻の宮があった場所は、現在の稚櫻神社（わかさくら：桜井市池之内）とする情報が有力らしい。

履中（りちゅう）天皇は、葛城の曾都毘古の子●葦田宿禰（あしたのすくね）の娘●黒比売命（くろひめのみこと）を妻として、●市辺之忍齒命（いちのべのおしはのみこと）・●御馬王（みまのみこ）・●青海郎女（あをみのいらつめ）の三柱を生んだ。青海郎女（あをみのいらつめ）は別名を●飯豊郎女（いいとよのいらつめ）と言った。 稚櫻神社 <https://yahoo.jp/9xzppS>

曾都毘古は、建内宿禰（たけしうちのすくね）の九人の御子の一人で、先代天皇（仁徳）の太后だった石之日売命の父親である。つまり、葦田宿禰（あしたのすくね）と石之日売命とは兄妹なので、曾都毘古の孫同士（いとこ同士）の結婚ということになる。また、建内宿禰系の人脈が感じられる。天皇は、墨江之中津王による宮殿への放火事件から自分の命を救う働きをしてくれた阿智（あち）の直（あたえ）を、出納を司る蔵官（くらのつかさ）に任命し、領地も授けた。

また、若櫻部の臣などに「若櫻部」という名を与え、比売陀の君などに「比売陀の君」という姓（かばね）を与えた。また、磐余（いわれ）という地名により伊波礼部（いわれべ）を定めた。

この天皇は64歳で他界し、陵は父と同じく毛受（もず）に造られた。陵は仁徳天皇陵の南西側に位置し、同じ向きに造られている。阪和線の上野芝駅の前にある。

次弟の蛭之水齒別命（たちひのみづはわけのみこと）が後を継ぐ18代天皇になり、末弟の男浅津間若子宿禰命（をあさづまのわくごのすくねのみこと）がその後を継ぐ19代天皇になった。

以上

履中（りちゅう）天皇を中心とした系図

